

アクティブラーニング学習法に関する実践報告

－バレーボール補欠選手が試合に出場できない不満を可視化する試みを題材として－

安田 貢*, 高根 信吾**, 遠藤 俊郎*, 湯澤 芳貴***

Practical report on active learning method
－Based on an attempt to visualize the dissatisfaction that volleyball non-regular players cannot participate in the game－

Mitsugu YASUDA*, Shingo TAKANE**, Toshiro ENDO*, Yoshitaka YUZAWA***

Abstract

In recent years, active learning has been actively conducted in which learners learn deeply, independently and interactively. Therefore, the purpose of this study was to practice an attempt to visualize the dissatisfaction that volleyball non-regular players could not participate in the game by active learning. As a result, verbalizing one's thoughts, discussing with others, seeing things from different perspectives, and providing opportunities for presentations were for learners to actively learn and deeply understand what they were learning. It can be seen that they are contributing.

Key Words: active learning, non-regular player, dissatisfaction, visualization

アクティブラーニング, 補欠選手, 不満, 可視化

I. 緒 言

近年, 知識・情報・技術をめぐる変化の速さが加速度的となり, 情報化やグローバル化といった社会的変化が起こっている。文部科学省³⁾は, このような社会的変化においても, 人間は感性を豊かに働かせながら, どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え出し, 自ら目的を設定し, その目的に応じて必要な情報を見出し, 情報を基に深く理解して自分の考えをまとめたり, 相手にふさわしい表現を工夫したり, 多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見出す強みを有していることを示している。そして新しい時代に必要となる学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養, 生きて働く知識・技能の習得, 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成ができるために, 主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)を推奨している³⁾。

スポーツの領域においても同様の試みがなされている。日本スポーツ協会では, 2019年4月からスポーツの意義と価値の理解やコーチングの理念・哲学, 対自分力・対他者力に関する内容の比重を増やした公認スポーツ指導者制

度を改定施行している。主な内容は, i) 講習会開催前にリファレンスブックでの学習およびオンラインテストによる知識習得の事前確認, ii) グループディスカッションによる学びや気づきを導く, iii) 学んだ内容を現場に持ち帰り実践することである⁶⁾。各分野の講師がそれぞれテキストに沿って講義を行っていた集合講習から資質能力を身につけたコーチングエキスパートの支援を受けながらアクティブラーニングを通じて, 自身の考え方や指導方法についてアウトプットを中心とした学び・振り返りの場を提供していることが従来のカリキュラムからの大きな変更点である。

学んだ内容をスポーツの現場に持ち帰り実践するためには, 先ず立場の異なる選手を理解することが必要である。競技スポーツの現場では常に試合に出場しているレギュラー選手と試合に出場できない補欠選手が相互作用しなければチーム力向上は望めない。レギュラー選手と補欠選手を比して, レギュラー選手の方が運動能力⁷⁾や外向性が高いこと¹¹⁾, 情緒不安定性が低いこと¹¹⁾が示されている。このようにレギュラー選手と補欠選手の身体的・精神的特性に言及し, 補欠選手が試合に出場できない要因を示しているようにもうかがえる。補欠選手であっても試合出場願望を抱いて日々の練習に励んでいることは疑う余地がない。補欠選手が試合に出場できない不満を理解しなければチームにとってはマイナスである。

そこで本研究では, バレーボール補欠選手が試合に出場できない不満を題材に, アクティブラーニング学習法の効

* : 山梨学院大学 (Yamanashi Gakuin University)

** : 常葉大学 (Tokoha University)

*** : 日本女子体育大学

(Japna Women's College of Physical Education)

果を検証することを目的とした。

II. 対象および方法

1. 実践対象：対象は第一筆者が担当する「バレーボールコーチング演習」を履修していた男子大学生 1 名、女子大学生 6 名である。7 名は強化育成バレーボール部に所属している 3・4 年生である。
2. 実践期間：2020 年 1 月にアクティブラーニングとして上記授業内で行った。
3. 実践・調査内容：競技種目をバレーボールに特化し、「補欠選手は競技スキルが欠けているために試合に出場できないが、このことに不満を抱いている」という場面を設定し、補欠選手の不満を可視化することを試みたアクティブラーニング型授業を実践した。具体的な内容は、補欠選手の立場にあることを想定して、各自で補欠選手が試合に出場できない不満を付箋紙 1 枚につき 1 つ書き出すように指示した（表 1；作業①-1）。その後、3～4 名のグループで KJ 法を用いて上記作業①-1 で挙げた付箋紙に書かれた類似する不満を集め、ラベリングした（表 1；作業①-2）。次に、レギュラー選手に立場を置き換え、上記作業①-1 および上記作業①-2 と同様の作業を行った（表 1；作業②-1、作業②-2）。そして、上記作業①-2 と上記作業②-2 で整理されたラベルを比べ、類似するラベルの有無についてグループディスカッションを行うように指示した（表 1；作業③）。これまでの作業から新たな気づきを整理するために、第一筆者が「スポーツ集団の特徴」についてレクチャーを行った（表 1；作業④）。さらに、グループごとに作業結果を発表、合同（全体）ディスカッション、まとめを行った（表 1；作業⑤）。最後に今回のアクティブラーニング学習法に対する学習の深まり（気づき）（1: まったくない～7: とてもあった、ただし「4: どちらでもない」に相当する選択肢は設けていない）、およびチーム内で意見の相違（対立）があった場合の解決策を自由記述で求めた質問紙調査を行った。

表1 アクティブラーニング学習法の作業手順

作業手順	内容
①-1	補欠選手の立場になって、補欠選手の不満を個別に考える
①-2	グループで話し合う。 上記作業①-1で類似している不満を近くに移動し、集まった内容にラベリング
②-1	レギュラー選手の立場になって、補欠選手の不満を個別に考える
②-2	グループで話し合う。 上記作業②-1で類似している不満を近くに移動し、集まった内容にラベリング
③	上記①-2と②-2の結果を比べて類似するラベル探し
④	「スポーツ集団の特徴」についてレクチャー
⑤	グループごとに作業結果を発表 合同（全体）ディスカッション まとめ

4. 検討方法：森本⁴⁾が示している学習行動モデル（表 2）に基づき、今回のアクティブラーニング型授業の進め方（作業手順）を検討した。そして、学習の深まり（気づき）およびチーム内で意見の相違（対立）があった場合の解決策を自由記述で求めた質問紙調査結果（表 7）を集約した。

表2 学習行動モデルおよび該当するアクティブラーニング作業手順の一覧

大カテゴリー	カテゴリー	行動	該当する作業手順
知識	理解する	理解する、知識を獲得する	④
	答える	解答する、回答する	
技能	情報収集する	収集する、調べる、検索する	①、②、⑤
	処理する	計算する、換作する、作図する、集計する、測定する	
	作成する	作成する、制作する、製作する	
	実技を行う	実践する、運動する、模倣する、練習する	
	実習する	実習する、体験する、実験する	
	プレゼンテーションする	プレゼンテーションする、スピーチする	
思考	予想する	推測する、仮説を立てる、推論する、予測する	①-1、②-1、③、⑤
	理由付ける	理由を考える、原因を考える	
	比較する	比較する、対比する	
	関係を見つめる	関係を見つめる、関連づける、規則性を見つめる、結び付ける、構造化する、順序を考える	
	分類する	グループ化する、当てはめる	
	多面的に捉える	批判的に考える、別の視点で考える	
	広げる	提案する、創造する、アイデアを出す	
	とらえる	読み取る、感じ取る、イメージをつかむ	
	解釈する	解釈する、観察する、把握する	
	まとめる	整理する、集約する、統合する、絞り込む、要約する	
判断	選択する	選択する、抜粋する、判断する	③
	決定する	決定する、定義する、結論を出す	
	検証する	検証する、評価する	
表現	文字で表す	記述する、記録する、記入する	①、②
	図で表す	図示する、図解する、モデル化する、グラフ化する、並び替える	
	言葉で表す	説明する、発言する、報告する、主張する、意見する	
	身体で表す	実演する、ロールプレイする	
対話	共有する	情報を共有する、見せ合う	①-1、②-1、③、⑤
	交流する	交流する、意見交換する	
議論、討議	議論する	議論する、話し合う、述べ合う	①-1、②-1、③、⑤
	討議する	討論する、討議する	
問題発見	課題設定を行う	問題発見する、課題を設定する	③
	方略を立てる	方略を立てる、見直す	
目標設定	目標設定する	目標を設定する、目標を確認する、評価基準をつくる、評価基準を確認する	③
	学習計画する	計画を立てる、概要を決める、構想を練る	

III. 結 果

グループ学習では、女子学生 4 名のグループ（以後 A グループ）および男子学生 1 名と女子学生 2 名のグループ（以後 B グループ）に分けた。調査対象者がレギュラー選手・補欠選手それぞれの立場から補欠選手が試合に出場できない不満を雑多な概念を論理的にまとめて図式化する KJ 法⁸⁾に基づいて類似する内容を集め、ラベリングを行った。その過程では第一筆者が必要に応じてディスカッションに加わった。なお、以後に示す生成された表札（ラベル）はバレーボール指導経験 15 年以上有する 2 名で合議した過程を踏まえている。そのため、実践対象者がディスカッ

ションで導いた結果から若干の修正がなされていることを承知いただきたい。

Aグループがレギュラー選手の立場から挙げた補欠選手の不満は、指導者に対する不満、補欠選手に対する否定的評価、一緒にプレーすることへの欲求、練習格差、同情、であった(表3)。Bグループがレギュラー選手の立場から挙げた補欠選手の不満は、指導者や練習に対する不満、レギュラー選手に対する不満、補欠選手に対する否定的評価、であった(表4)。Aグループが補欠選手の立場から挙げた補欠選手の不満は、指導者に対する不満、レギュラー

表3 レギュラー選手の立場から見た補欠選手が試合に出場できない不満 (Aグループ)

表札 (タイトル)	ラベル (状況)
指導者に対する不満	<ul style="list-style-type: none"> あの選手(補欠)よりも下手な選手を外せばいい。 補欠選手より下手な選手が出ている。 指導者はろくにみえてくれない。 どのような基準で選手を選んでいるんだろう。 監督に嫌われているのかな。
補欠選手に対する否定的評価	<ul style="list-style-type: none"> 何で出られないのか自分で考えた方がいい。 いつまでも本当に変わらない奴だな。 練習で手を抜くな。 だって下手だよ。 技術不足だよ。
一緒にプレーすることへの欲求	<ul style="list-style-type: none"> 一緒にバレーボールしたくない(補欠選手に悪いところしかない場合) 一緒にプレーしたい(補欠選手に良いところがある場合) 一緒にプレーしたいのに。
練習格差	<ul style="list-style-type: none"> 練習に差がある。 レギュラーと練習内容が違う。 練習でボールに触る回数が違う。 チーム練習になったらボールに触れる機会が減る。 ゲームでしか得られないこともあるのにその機会がないと上手くならない。
同情	<ul style="list-style-type: none"> 試合に出られないから。 ゲームに出られないと楽しくない。 試合に出ているとボールに触れる機会が減るし、つまらない。 試合見ているのはつまらない。 ただ立っているだけは辛い。 審判ばかり。 つまらなそう。 落ちこぼれないといいな。 辞めるかな。辞めない方がいいよ。

表5 補欠選手の立場から見た補欠選手が試合に出場できない不満 (Aグループ)

表札 (タイトル)	ラベル (状況)
指導者に対する不満	<ul style="list-style-type: none"> 何が足りないのか。 何がどこがダメなのか分からない。 試合に出られる選考基準が分からない。 レギュラーの決め方に問題がある。 メンバーの決め方が嫌だ。 理不尽な人だ。 試合に出して欲しい。 どうして試合に出してくれないのか。 出してくれない理由を教えてください。 自分より下手な人が出ている。
レギュラー選手に対する不満	<ul style="list-style-type: none"> 自分の方が上手い(そう思っている)のになぜ違う人が出ているのか。 練習をちゃんとやっていない人が出ている。 出て欲しくない人が出ている。
試合出場欲求	<ul style="list-style-type: none"> 試合に出たい。 試合に出たいのに出られない。
苛立ち	<ul style="list-style-type: none"> 楽しくない。 悔しい。 情けない。 辞めたい。 試合の中で得るものがある(スキルもメンタルも)。

選手に対する不満、試合出場欲求、苛立ち、であった(表5)。Bグループが補欠選手の立場から挙げた補欠選手の不満は、指導者に対する不満、レギュラー選手に対する不満、チャンスが得られない失望感、であった(表6)。

表1に示したアクティブラーニング学習法の作業手順が学習行動モデル(表2)にどの程度適合しているのか検討した結果、【知識】は作業④で、【技能】は作業①、作業②、および作業⑤で、【思考】【対話】【議論、討議】は作業①-1、作業②-1、作業③、および作業⑤で、【判断】【問題発見】【目標設定】は作業③で、【表現】は作業①、および作業②

表4 レギュラー選手の立場から見た補欠選手が試合に出場できない不満 (Bグループ)

表札 (タイトル)	ラベル (状況)
指導者や練習に対する不満	<ul style="list-style-type: none"> 指導者に不満。 練習メニューに不満。
レギュラー選手に対する不満	<ul style="list-style-type: none"> レギュラーのプレーが雑だから。 試合に勝てないから。
補欠選手に対する否定的評価	<ul style="list-style-type: none"> 直ぐサボる。 しっかり練習していない。 ボールをしっかり追いかけて。 声を出せ。 反抗ばかりしている。 言われた事を素直に受け入れて。 やる気があるように見えない。 監督の文句ばかり言う。 文句ばかり言っている。 レギュラー中心の練習に対する態度が悪い。 態度が良くない。 天狗になっている。 自分より下手だろ。 全てにムカつく。

表6 補欠選手の立場から見た補欠選手が試合に出場できない不満 (Bグループ)

表札 (タイトル)	ラベル (状況)
指導者に対する不満	<ul style="list-style-type: none"> ひいき。 指導者のお気に入りで試合に出ている。 指導者の好き嫌いで試合に出ている感じがする。
レギュラー選手に対する不満	<ul style="list-style-type: none"> 自分より練習していない人が出ている。 自分より下手な人が出ている。 嫌いな人が出ている。 レギュラーがちゃんとしていない。 レギュラーがしっかりしていない。 レギュラーなのに文句しか言っていない。
チャンスが得られない失望感	<ul style="list-style-type: none"> チャンスがない 少しは出して欲しい。 試合に出られない。 私を見て欲しい。 バレーボールが楽しくない。

で導かれていたと考えられる (表 2)。

学習の深まり (気づき) は概ね得られていた (B ~ G 氏) (表 7)。そして、チーム内で意見の相違 (対立) があつた場合の解決策を自由記述で求めたところ、7 名中 5 名が記述していた。主な内容は、しっかり意見を出し合う、自分と他者の意見を尊重した上で解決策を模索する、対立することが悪いのではなく問題を放置することが悪い、であった。

表7 学習者によるアクティブラーニング授業評価

履修者	学習の深まり (気づき)	自由記述: チーム内で意見の相違 (対立) があつた場合の解決方法
A氏	3	
B氏	5	けんかして、言い合つて意思の確認や共有していい所は伸ばす。ダメな所はお互いに直す。対立することは別に悪くない。その状態を放置することが悪いだけ。そこからチーム力向上につながるきっかけができると思う。
C氏	5	
D氏	6	各自がそう思う理由などを話して、内容を理解した上で、それに対する意見などを言い、話し合いを深めていく。
E氏	6	お互いに感じていること、思っていることを理解し合う。
F氏	6	対立があつた場合は、お互いの思っていることを話し合い、理解し合うことが大切。そして、お互いに理解した上で肯定的評価ができる環境を作つて評価し合うことが大切である。
G氏	7	お互いに違うところを再確認し、どちらか一方が折れるのではなくお互いが納得できるように話し合う。また、第三者の意見を聞くことも大事である。

IV. 考 察

学習者自らの思考を言語化すること、他者と話し合うこと、異なる視点から物事を捉えること、発表する機会を設けることは学習者を深く、対話的・主体的な学びへ導くことがうかがえた。

日本スポーツ協会⁵⁾によれば、対人関係の問題解決に向けて、i) コーチングで直面し得る人間関係の問題について考える、ii) 意見の相違を解決するためのアプローチについて考える、iii) ロールプレイを通して対人関係の問題を解決していくスキルアップを図る、iv) このセッションにおける新しい学びを書き留める、というプロセスによってコーチング現場で起こり得る様々な対人関係の問題に適切に解決していくために、今後自分が身につけていくべき對他者のスキルが明らかになり、コーチングの課題を整理する有益性を示している。今回のアクティブラーニング学習法の主な教示手順 (表 1) は、補欠選手の不満を言語化すること、グループメンバーとディスカッションすること、異なる視点 (レギュラー選手・補欠選手) から同じ出来事 (補欠選手が試合に出場できない不満) を捉えること、グループ発表を課したことであり、日本スポーツ協会⁵⁾が示しているコーチングの課題を整理する手順に沿った内容であった。また、田中¹⁰⁾によれば、問題を書き出す

ためには、まず問題にしっかりと向き合わなければならず、向き合うのが面倒だったり、認めたくなかったりすると向き合うのを避けてしまつて書けなくなる。言語化は思考を可視化するためだけではなく、知識の習得や学習において重要な役割を有しており、補欠選手の不満を抽出するために言語化する試みは学習者の思考や表現に関わる深い学びを導けたと考えられる。さらに、グループメンバーとディスカッションすることは学習者の対話的・主体的な学びを導いている。加えて、相手の立場になってみる (感情移入することによって相手に起こっている主観的な体験がどんなものであるのかわかってくる²⁾⁹⁾ことから、レギュラー選手・補欠選手異なる立場から補欠選手が試合に出場できない不満を対比させたことによって、学習者が問題を発見し、解決に向けた計画立案を促す主体的で深い学びを得たと思われる。最後に発表する機会を設けたことによって、主体的なまとめ、プレゼンテーションを行う技能が促進できた。

グループで生成したラベルを概観すると、レギュラー選手と補欠選手の共通点は既知の理論が参考となる。大学生レギュラー選手と補欠選手の運動部への参加動機と原因帰属を検討した横断研究¹²⁾によれば、レギュラー選手は運も良かったが努力もしたこと、補欠選手は入部したチームが悪かったことに自身の置かれた立場の原因を帰属する傾向があることを明らかにしている。レギュラー選手は補欠選手が練習で努力を怠っている態度が、補欠選手はレギュラー選手の存在が試合に出場できない原因に挙げた。つまり自身の立場と異なる選手に不満を抱えていることが共通点に挙げられる。次に、スポーツに参加する子どもに与える大人の影響について自己決定理論に基づいたレビュー¹⁾を行った結果、子どものあるパフォーマンスに対する親からのフィードバックが自分の判断や努力による成果であることを認める (自律性欲求を満たす) 内容のものであれば、その子どもの内発的動機づけは維持される、あるいは高まることを述べている。試合に出場できた理由が分からず、単に試合に出場しただけでは選手のやる気が高まることはないと思われる。指導者は選手に試合に出場させる選考基準を示し、選手が努力する方向性を明確にすることが望まれる。そうでない指導環境であれば上述したレギュラー選手が指摘する補欠選手の練習態度に至る可能性がある。つまり、指導者が選手選考基準を示していないので補欠選手は努力する方向性に戸惑った結果、努力を怠っているように見える問題行動を表出していることも考えられる。表 3 に指導者に対する不満として「補欠選手より下手な選手が出ている」ことが挙げられているようにレギュラー選手の立場からも指導者が選手選考基準を示さなければ補欠選手が戸惑い、不満の矛先が指導者に向けられる認識を有していることが推察される。また、補欠選手自

身が試合に出場できない不満を選手選考の決定権者である指導者に向けることは容易に想像できる。レギュラー選手・補欠選手共に補欠選手が試合に出場できない不満を指導者に向けている認識も共通点に挙げられる。

また、レギュラー選手と補欠選手では自身の立場を省みることに相違が見られる。高校生および大学生の補欠選手162名を対象に運動部活動を続ける要因を因子分析した結果、上達志向、社会的有用性、運動目的、非運動目的、支援の5因子を抽出している¹³⁾。レギュラー選手は少しでも上手くなり競技を楽しみたい「上達志向」を有している補欠選手とは一緒に活動することを望んでいる。レギュラー選手は補欠選手が対戦相手や自チームを分析し、試合に出ているチームメイトを応援してくれる「支援」があることで試合に出場できる。そのため、レギュラー選手は自身が日々の練習で一生懸命プレーしていない姿勢や試合で結果が残せないことが補欠選手の不満に繋がる自らを省みる認識を有している。一方、補欠選手はチャンスが得られずに失望感や苛立ちを表出するものの、自らの言動を省察することはうかがえない。

質問紙調査結果から学習の深まり(気づき)が7名中6名から得られたことから概ね今回のアクティブラーニング学習法に成果が見込めるものと思われる。さらに、チーム内で意見の相違(対立)があった場合、他者の視点から解決策を見通す様子がうかがえることからレギュラー選手と補欠選手の立場から物事を捉えることで問題を発見・解決する深く対話的な学びができたと思われる。

最後に本研究の限界を述べる。先ず、実践した人数が少なく、種目を限定していることから一般化には慎重な解釈が求められる。さらに、性差があることが想定されるものの当該授業の履修男子学生が1名であったことから性差には言及できないことも限界である。

V. 結 論

自らの思考を言語化すること、他者と話し合うこと、異なる視点から物事を考えること、および発表する機会を設ける学習プロセスは、学習者が自ら能動的に学び、学習内容を深く理解し、資質・能力を学ぶことに寄与していることがうかがえた。

補欠選手が試合に出場できない具体的な不満要因は次のことが考えられる。レギュラー選手・補欠選手共に不満の対象として選手選考の決定権者である指導者を挙げていた。また、レギュラー選手は補欠選手に、補欠選手はレギュラー選手に不満を抱いている構造もうかがえた。さらにレギュラー選手は自身が努力を怠ることや試合で結果が残せないことが補欠選手の不満に繋がる自らを省みる認識を有

していた。

最後に、考察の過程では指導者が試合出場の選考基準を明示する重要性を提言とした。

VI. 引用・参考文献

- 1) 久崎孝浩・石山貴章：スポーツに参加する子どもの心理的発達に及ぼす大人の影響～その研究動向と今後の方向性. 応用障害心理学研究, 45-67, 2012.
- 2) 松本卓也:心の病気ってなんだろう?. 初版, 平凡社, 2019, pp7-77.
- 3) 文部科学省:新しい学習指導要領の考え方-中央教育審議会における議論から改定そして実施へ- http://www.mext.go.jp/a_menu/.../09/.../1296716_1.pdf (参照日 2020年9月2日), 2017.
- 4) 森本康彦・伊藤明裕・丸山浩平他 アクティブ・ラーニングの学習評価のモデル化. 日本教育工学会研究報告集, 17 (1), 581-588, 2017.
- 5) 公益財団法人 日本スポーツ協会:公認スポーツ指導者養成講習会共通科目Ⅲ集合講習会 Work Book. Ver1.1, 公益財団法人日本スポーツ協会, 2019, pp23-34.
- 6) 公益財団法人 日本スポーツ協会:スポーツ指導者 <http://www.japan-sports.or.jp/> (参照日 2020年4月1日), 2018.
- 7) 岡野憲一・九鬼靖太・吉田拓矢・谷川聡 全国トップレベル高校女子ハンドボールチームにおける形態および運動能力の特性:レギュラー選手と非レギュラー選手の企比較から. 体育学研究, 64, 419-428, 2019.
- 8) 佐藤望(編著)他:アカデミック・スキルズ~大学生のための知的技法入門~ 情報整理(KJ法について). 第3版, 慶應義塾大学出版会, 2020, pp111-117.
- 9) 玉瀬耕治:カウンセリングの技法を学ぶ. 初版, 有斐閣, 2015, pp79-92.
- 10) 田中ウルヴェ京 マイナス思考と失敗に向き合う. コーチングクリニック, 9, pp48-51, 2016
- 11) 浦佑大・高井秀明・高橋由衣・岩崎宏次 競技特性及びチーム内での地位の違いがアスリートの性格特性に与える影響. 日本体育学会大会予稿集, 69, 107, 2018.
- 12) 山本教人:正選手と補欠選手の運動部への参加動機と原因帰属様式. 健康科学, 13, pp49-58, 1991.
- 13) 山崎駿・鈴木秀人:高校生・大学生の運動継続に関する研究~補欠選手が運動部活動へ関わり続ける要因に焦点を当てて~. 東京学芸大学紀要芸術・スポーツ科学系, 67, pp121-127, 2015.